

銅版画と浮世絵風景画

大久保純一

Copperplate Etchings and Ukiyo-e Landscape Prints

はじめに

- ① 司馬江漢の江戸名所銅版画
 - ② 亜欧堂田善の江戸名所銅版画
 - ③ 田善の銅版画と国芳
 - ④ 広重の場合
- 結びにかえて

【論文要旨】

本稿は、江戸名所を描いた司馬江漢と亜欧堂田善の銅版画を、名所景観をとらえる視点と画における人物風俗の描写という二つの観点から分析し、さらに歌川国芳・歌川広重らの浮世絵風景画との比較を行う。この作業を通して、江漢・田善から浮世絵風景画へと発展していくとされる従来の江戸後期風景画の流れに対する図式的な理解を、再検討しようと試みるものである。

従来、浮世絵風景画に大きな影響を与えたとされている江漢の銅版画群の多くは、覗き眼鏡のための眼鏡絵として制作されたため、画中における人物の役割は主として遠近感を出すための添景である。また名所景観をとらえる視点という面でも歌川豊春らの浮世絵の視点を踏襲しており、必ずしも革新的ではない。

一方、これまで豊かな風俗描写が指摘されてきている亜欧堂田善の江戸名所を描いた銅版画群だが、風俗を美化・典型化した浮世絵とは異なる、生々しい写実性が大き

な特色である。また景観描写に関して、従来の浮世絵的な視点から脱却し、かつ名所ごとに固定化しつつある景観のイメージにとらわれない、新しい視点の設定に成功している。

こうした田善の銅版画の特色は、「東都宮戸川之図」など、歌川国芳の天保前期の江戸名所絵の風俗描写と視点の設定に大きな影響を与えている。また、名所の定型化した図様を重視した歌川広重の作品の中にも、一部、田善作品の景観をとらえる視点の影響が認められる。

結論として筆者は、旧来の浮世絵にとらわれた江漢の銅版画よりも、浮世絵的な視点から脱却した田善の銅版画のほうが、江戸末期の浮世絵風景画の成立に関して、より大きな影響を及ぼしたものと考える。